
或いは、御伽噺

玉響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

或いは、御伽噺

【Nコード】

N9658Y

【作者名】

玉響

【あらすじ】

大川華奈、谷本美桜、宮野麻音の三人は、中学の頃からの付き合いだ。所謂、親友である。そんな彼女達は久々に会う約束をし、そして、華奈が唐突に言った。「小説を書こうと思う」 斯くして、物語は始まった。束の間の再会から、見知らぬ庭園へ。出逢ったのは王とその側近達。夢では、ないのだ。異世界トリップファンタジーで、友情ベースにノリと勢いで書いてます。恋愛が入るかは謎。結末や如何に。

「小説を書こうと思う」

椅子に座るなり、大川華奈おおかわはなはそう言った。

「なんで小説？」

華奈の言葉に、思わずストローから口を離して聞き返したのは、谷本美桜にもとみおうだ。
その隣に座る宮野麻音みやのあさねは、パックの口を開こうとしていた手を止めている。

彼女達が出会った頃から成人を過ぎた今も利用する、市の施設にある小さな憩いの場。
ここに集まる時は、近くのコンビニで小さなパックの飲み物を買うのがお決まりになっている。

美桜は二人よりも一足先に飲み始めたのだが、直後に華奈の言葉である。

そして、飲み始めたのも忘れて聞き返した美桜は、ごほっと少しむせた。

「どっ、ちかティッシュ、持って、ない？」

「何やってるの、谷ちゃん」

麻音はそう言いながらも、美桜　　谷本なので谷ちゃんだ　　にテ
ィッシュを手渡した。

受け取った美桜は口元にティッシュをあて、落ち着いたら麻音へと
笑いかけた。

「ありがとー。麻音は手早いうえに優しい」

「はいはい、どういたしまして」

麻音はさらりと返事をしながら少し笑った。

そして、そこに少し呆れた色を混ぜ、二人より遅れてパックを開け
ている華奈へと向く。

「相変わらずめんどくさがりだね、華奈ちゃんは」

「ホントだよ！今少しも動かなかったっしょ！」

同意する美桜は、文句を言いつつ顔は笑っている。

言われた本人である華奈は少し首を傾げたあと、さも気が付いたか
のような顔をした。

「ん？ああ、麻音対応早いから出遅れるんだよ」

「いやいや、絶対面倒だからっしょ」

「まあ、それもあるけど。十割くらい」

華奈がちらりと笑って肯定すれば、美桜と麻音が全部じゃん！とケラケラ笑った。

「もう、華奈ちゃんってば……それで、話を戻すけど、なんで小説なの？」

麻音が華奈の方へ身を乗り出せば、美桜も同じく身を乗り出す。

「そうそう。だって『夜遅くにごめん。突然だけど小説書こうと思う』って。本当に突然だし！」

「しかも真夜中だったからね。本当に夜遅いよって思った！」

「思った思った！」

「今回は今までで一番突拍子なかったよね！」

「そう！だから、ついに華奈の頭がオカシクなったかと思った！」

「二人とも」

腹を抱えて笑う二人に、華奈が満面の笑みを浮かべて言った。

「殴るぞ」

「すみませんでした」
「ごめんなさい」

0 - 2 (前書き)

謝った二人を見て華奈はしょうがない、といった様に肩をすくめてみせる。

「まあ、いいけどね。本当に突然だったし」

「ですよー」

「だけど、頭おかしくなったはないなあ」

「華奈さんすみませんでした！」

勢い良く頭を下げる美桜を横目に、華奈は先程の問いの答えを言う。

「小説を書くのはね、メールでも言ったように本当に気紛れなんだよ」

「気紛れで小説って……」

麻音は華奈を見ながら、ぽつりと呟いた。

その呟きを隣で拾った美桜は、少し思う所があるように口を開く。

「気紛れねー。ま、今はネットでも書けるし」

「そっか、確かに。携帯小説だってあるね」

美桜と麻音の言うように、書く場のハードルは低くなっていて、書こうと思えば書ける時代なのだ。

書き手は様々、作品はピンからキリまで、である。そして、読み手もあり。

「まあ、そんな感じであたし達をモデルにして、これから書くんだけど」

ここから、本題。

「二人には始まりだけでも伝えておこうと思って」

だから、こうしてそれぞれの時間を少しだけ割いてもらったのだ。

割いてもらった、と言うには僅かすぎる時だけれど。

歳を重ねるごとに、同じ出来事を共有するのは難しくなっていく。時間を作って、会って、話して、交わるのだ。

離れても、心を感じることが出来るように。

「Once upon a time」

それは、まるで。

するりと耳へ入った流暢な音に、最初に我に返ったのは麻音だった。

「あ、え、ワンス……？ええと、もう一度言ってくれる？」
「ワンスモアプリーズ！」

わざとだろうか、明らかにカタカナの音で美桜が言った。
直後、その前に聞き返した麻音はきつと美桜を睨む。

「谷ちゃん、ちょっと黙ってて」
「え、真面目に言ってるのに」
「それで？」

麻音が驚けば、どうやら本当に真面目だったらしく、美桜は「麻音
ひどっ」と机に崩れた。

二人の向かいに座る華奈は、くすくすと愉快そうに笑う。

「本当に二人は面白いなあ」
「一緒にしないで！」
「面白くないから！」

同時に口を開くも、相手が違うことを言ったので麻音と美桜は顔を見合わせる。

その様子がさらに華奈の笑いを引き起こし、二人は少しづつが悪い顔をした。

「ほらほら、そんな顔してないで。Once upon a time there are……っていうように続くんだけどね」
「それが始まりなの？」

気を取り直した麻音は椅子に座り直し、美桜はまた身を乗り出した。そんな二人を見て、華奈は落ち着いた様に深く座り直した。

「まあ、そう考えてる」

「なんで？」

「なんでって……まあ、御伽噺みたいなものだから、かな」

おとぎばなし、と麻音が華奈の言葉を小さく復唱する。

「つまり童話みたいなの？グリムみたいのはやだかね」

心底嫌そうな顔の美桜に、華奈は苦笑しながら否定する。

「んー、そうじゃなくて……夢物語みたいな、ね」
「ああ、そういうの！」

ようやく合点が行った、というように麻音が声をあげる。

美桜はいえ、華奈の言葉に目を生き生きとさせて、言った。

「なるほど夢ね、夢。それだけで妄想できる」

華奈と麻音から返ってきたのは沈黙だったが。

「ちょ、無視!？」

「あ、もう帰らなきゃなあ。やっぱ今度改めて時間作ろう」

「だね。平日にいきなりは厳しいもんね」

「さらにスルー……!」

美桜さんは傷付きました、よよよ、と泣き崩れる振りをする美桜に、二人はようやく笑いかけるのだった。

帰り仕度を済ませ、下りのエレベーターを待つ合間、おもむろに華奈が携帯を取り出す。

「序章ちよつとだけ携帯で書いたから、一応送るね」

「おー！ばつちこい！」

「うわー、ドキドキする！」

美桜と麻音は素早く携帯を取り出した。

二人がうずうずとしているのが見て取れ、華奈は思わずふつと吹き出す。

「そんな期待されてもなあ」

「いやいやするでしょ！それで華奈は早く飲み終わんないと麻音が二度とゴミ捨てないって！」

「そうだよするよ！それから谷ちゃん勝手なこと言わないでよ！ちやんと捨てますからね」

急上昇したなあ、と華奈が思ったところで、ポーンとエレベーターの到着音がした。

扉が開き、乗り込む際に華奈が美桜に「持ってて」とバックを手渡す。

受け取った美桜は、飲みかけにしては軽すぎるパックを振ってみた。

「ってこれカラじゃん。潰しておこうか？」

「あらまあ、お願いします」

「……華奈ちゃん、まさか」

わざとなんじゃ。

続くはずだった麻音の言葉は、華奈に満面の笑みを向けられ、飲み込まれた。

「あ、あー…華奈ちゃん？」

なので、飲み込まれた言葉の代わりに、聞こうと思ったことへ頭を切り換えてみる。

遠い目をする麻音に不思議そうな顔で、潰したパックを渡す美桜に複雑な思いを抱くのは、きっと気のせい。

「今更で悪いんだけど、ワンスなんかの訳って何て言つの？」

麻音の問いに、華奈は一瞬きょとんとしてみせた後、心底楽しそうに笑う。

ポーンと音がして、エレベーターの扉が開く。

三人は手に携帯を持ったまま、外へ向かって一歩踏み出して。

そして、華奈はゆっくりと口を開き、言った。

「Once upon a time」

まるで、秘め事を囁くように。

「
或いは、昔々」

草の匂いがした。

華奈^{はな}は美桜^{みおう}と麻音^{あさね}から正面へと顔を戻し、二人も視線を上げる。

豊かな緑が生い茂る庭。

噴水の水が太陽の光で煌めき、いかにも涼しげだ。

その奥にそびえ立つ城は、荘厳でいて美しい。

「ちよつ……と、何、この冗談」

笑えないんですけど、と美桜が呆然と呟いた。

「……冗談は谷ちゃんでしょ。妄想に巻き込まないで」

「いくら私でも風景の妄想なんてしないから。イケメンだけだから」

「うわ、面食い！」

「面食いで何が悪い！ってかこういう建物は私より麻音でしょ」

「確かにそうだけど、こういう現役っぽいお城じゃなくて年季入ってる方が好きだよ」

「ああ、ならこの分野は華奈か」

「華奈ちゃんでしょう。意外とメルヘンチックな」

「二人とも」

あ、やばい、くる。

「現実逃避すんな」

につこりと笑った顔が、背景も合わさってとても素敵です。

そんな風に思っているにも、何が変わる訳でもない。
目の前ばかり見ていると仕方がないのは、美桜も麻音も分かっていた。

それでも、後ろを振り返って、あつて欲しいものを確かめるのが怖かった。

だって、二人の背後が見えているはずの華奈は、何も言わなかった。
二人は震える心を叱咤して、ぎゅっと目を瞑り、深く息を吐き出し、
ゆっくりと振り返った。

果たしてそこには、何も無かった。

そして、美桜はすうつと思いきり息を吸って。

「エレベーターが無い事がどうした!」

「いや、問題あるよ」

「というか、問題しかないけどね」
「ですよー」

遠い目をした美桜の肩を華奈は叩いて慰めた。

「じゃあ、今後について話そうか」

「ってテンポ良くしたいところだけど、取り敢えず隠れよう」

「え？」

「隠れる？」

二人の怪訝そうな顔を見て、華奈は肩をすくめて口を開く。

「まあ、こんな怪しい場所で、しかも見渡しの良い所にいつまでも突っ立てちゃまずいからね」

華奈の言い分に、美桜と麻音はそうか、と頷く。

華奈はぐるりと周囲を見て、硝子張りの温室らしき建物に目を留める。

「あの温室の近くまで行こうか」

温室はそう遠い場所になく、身を隠すにはもってこいだ。それに、ああいう建物は簡単には立ち入れない筈だ。

（セオリーでは、ね）

「あたしは後ろに付くから、二人は一緒に行つて」
「いいの？」

「うん、行つて」

「匍匐前進とかやつた方がいい？」

「出来るならね」

「すみません普通に行きます」

美桜の言葉を最後に、二人が走つて行く。
その背中を見て、華奈は思った。

特別そんな庭だったのは、不幸中の幸いだと考えるべきだ。
これから何があるうとも。

（それにしても……）

なんて、

（ああ、いけない。二人を追わなければ）

何処かへ行きそうになる思考を華奈は引き戻した。
そして、最後に一度、周囲に視線を走らせてから、先に行かせた二人を追いかけた。

その直ぐ後、彼女達のいた場所から少し離れた茂みで、二つの影が揺れた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9658y/>

或いは、御伽噺

2011年11月29日21時48分発行